

VI 総合的なまとめ

1 確かな学力の向上に向けた取組みについて

本研究会では、平成27年度より3年間、綾瀬市の子どもたちにおける確かな学力に関する諸問題や実態の要因を探り、問題の解決に資することを目的として、研究テーマを「確かな学力の向上に向けた取組みに資する調査」とし、調査及び分析を行った。

本調査で明らかになったことについて報告書としてまとめるとともに、その要約を提言として整理した。

(1) 目指す子どもの姿「今日学んだことを伝えたい子ども～家庭学習力の育成～」について

目指す子どもの姿「今日学んだことを伝えたい子ども～家庭学習力の育成～」とは、学校で1日学んで「わかったところ」「わからなかったところ」などを含め、自分自身が学校で学んだことを認知し、家庭でも自主的に学習する子どものことを指す。今回の調査結果では、確かな学力を向上させるためには、上記のような子どもを育成することが重要であると考えた。

しかし、このような子どもを一朝一夕に育成できるものではない。「子どもと先生の現状を把握し、確かな学習習慣を身に付け、学校全体でビジョンを共有し、ベクトルをそろえる」いわゆる“5つのS”が成功の道り（Success Story）となると結論づけた。

(2) 確かな学力の向上に向けた「Success story」、“5つのS”について

ア Student First（児童・生徒調査から）

調査結果から、子どもたちは一人で考える学習や能動的な学習の方法に課題があり、授業の内容はよく理解できているが、習得できた（学力の到達）とは感じていない。また、学習上の悩みとして、「疲れや眠気等で勉強ができない」や「勉強方法が分からない」など、自分の内面的な要因の悩みとともに学習方法についての悩みが上位にきている。さらに、家庭生活の時間の使い方において、テレビやテレビゲーム、携帯・インターネットの利用などの時間が多く、学習する時間が短いことが分かった。その一方で、家庭生活上で増やしたい時間についての質問には、勉強や読書といった回答も多く、学習に対して前向きな姿勢も見られた。

これらの結果から、家庭で学習をしなければならない気持ちはあるものの、様々な要因でできていないことが分かった。

イ Smile Teacher（教員調査から）

小・中学校の教員はともに、「グループ学習やペア学習」を取り入れながら「講義形式学習」を中心に進めている。また「目標の提示」や「振り返り活動」も意識的に取り組んでいる。しかし、教員は子どもに「自分たちで課題を設定させる学習」に取り組ませたいと思いつつも、実際には、教えるべき内容の伝達に追われ、思うように実施できていないことが分かった。

宿題については、小学校では概ね毎日出されていて、その内容について教員同士でよく話し合われている。しかし、中学校では教科担任制ということもあり、毎日（毎回）出すことや教員同士の話し合いは小学校と比べると少ない。

教員の学習指導上の悩みの1位は、小・中学校ともに「教材研究等の時間不足」で、その他の悩みについても、校種間で概ね一致している。経験年数別で見ると経験年数が多いほど「基礎的・基本的な知識・技能の定着」への悩みが多く、経験年数が少な

いほど「苦手な学習への取り組みせ方」「児童・生徒へのかかわり方」に多くの悩みがあることが分かった。

ウ See and gap relation (児童・生徒調査と教員調査から)

「講義形式の学習」や「教師設定課題学習」については、教員が思っているよりも子どもは好意的に捉えている。また、「グループ学習」「少人数学習」「自己設定課題学習」については、教員が思っているよりも子どもは好意的に捉えていない。つまり、子どもと教員の間には、能動的な学習等に対する思いにずれがあることが分かった。

「意見等の発表」については、子どもより教員の評価の方が高く、「友達の話等への傾聴」「教師の話等への傾聴」「自分の考えの文章化」「話し合いでの思考深化」については、子どもの自己評価が高い。言語活動にかかわる学習活動の評価について教員と子どもにずれがあることが分かった。

エ Study Homework (家庭学習力の重視・習慣化)

「学力が身に付いていないと推測できる子ども」は、「学力が高いと推測できる子ども」よりも家庭学習の時間が短く、テレビ・ゲーム・携帯（インターネット）等の利用（視聴）時間が長いことがデータで明確となった。また、子どもたちは授業で理解したと感じていても、完全に習得できた（学力の到達）とは感じていない。つまり、「学力が身に付いていないと推測できる子ども」と「学力が身に付いていると推測できる子ども」の差は、家庭学習の時間が大きく左右していることが明白となり、家庭学習の必要性が浮き彫りとなった。

子どもに「家庭学習力（家庭学習を自主的に行う力）」を身に付けさせることが大切である。しかし、学力が低い子どもは学力に関する自尊感情が傷つけられていて、学習意欲が失せてしまっている。学力が低い子どもには、確かな学習習慣をつけることが先決である。よって、家庭学習の仕方や取り組む姿勢をきちんと指導して、「確かな学習習慣」を身に付けさせる。それが最終的に「家庭学習力」につながると考えた。

オ School Management (学校・綾瀬市の取組として)

学校のすべての教員がビジョンを共有し、ベクトルをそろえることが最も大切である。そして、いろいろなことに手当たり次第に取り組むのではなく、重点を置く所について注力し、一つずつ確実に、成果が出るまでぶれずに継続する必要がある。

宿題や課題の出し方なども、学校で大枠を統一し、協力していくことが重要である。さらに、綾瀬全体で統一された取組みにしていければさらによりよい結果をもたらすのではないかと考えた。

- 例) ○3回の復習

 - ・授業終末、帰りのHR、家庭学習での振り返り

○家庭学習時間の設定

 - ・1日最低1時間以上は取り組む

○小学4年生から中学3年生まで継続

○宿題課題の統一

 - ・基礎計算、漢字、英単語習得、短作文（日記）等

○読書・音読

○自主学習ノート

2 おわりに

今回の教育調査は、綾瀬の児童・生徒及び教員の実態を明らかにし、今後の綾瀬の確かな学力の向上に向けた取組みについて有意義な調査を行うことができた。

その成果の一つ目は、質問紙の作成である。今回のテーマをもとに、「確かな学力とは何か」、「綾瀬の子どもたちの課題は何なのか」など様々な議論を繰り返すとともに、全国学力状況調査の質問紙や先行研究等を参考にして予備調査を行い質問紙を作成した。特に、子どもと教員のそれぞれの思いや考えが比較できるように統一した設問を作成したり、全国学力状況調査とも参考比較できるようにしたりしたことである。成果の二つ目は、校種間や学年間、子どもと教員さらに教員の経験年数別のグループなど、様々な視点で比較分析できたこと、そして三つ目は、この報告書の作成である。目指す子どもの姿を明記するとともに、そのステップを「5つの“S”」として表記し、これらを提言としてまとめることができた。綾瀬市の先生方に手に取って見ていただけるように調査結果をもととした分かりやすい報告書になったのではないかと思います。

課題としては、質問項目の精査は十分した上で質問紙を作成したが、結果として、教師の質問項目の中で、特別支援級担当、教科の特性や学校事情によっては質問にあてはまらないものがいくつか生じてしまった。回答に際し、回答者を困らせてしまったと感じている。今回の分析に際し、該当データを精査しデータ処理させていただいた。また、成果と表裏一体の部分ではあるが、この報告書が各学校でより活用していただけるように研究成果について研究発表の場などで丁寧に説明していく必要があり、今後の課題としていきたい。

最後になりますが、今回の教育調査及び研究を行うにあたり、多くのご指導・ご助言を頂いた横浜国立大学名誉教授 岡田守弘氏に感謝いたします。また、学校行事等が立て込んでいたなか、調査に協力していただいた各校の校長先生をはじめとする綾瀬市の先生方、そして、子どもたちに感謝いたします。今後の綾瀬の教育活動の一助となれば幸いです。

<引用・参考文献>

- ・平成 27・28 年度 全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問調査 文部科学省
- ・平成 28・29 年度 全国学力・学習状況調査 報告書 文部科学省 国立教育政策研究所 2018 8 月
- ・ベネッセ教育総合研究所 第 5 回学習基本調査・国内調査報告書 2015
- ・ベネッセ教育総合研究所 第 6 回学習指導基本調査 D E T A B O O K 2016
- ・耳塚寛明 合田哲雄 『効果のある学校 7 つのルール』総合教育技術 2016 5 月
- ・教育調査研究報告書 第 14 集 綾瀬市第 4 次教育基本調査（平成 25 年 7 月実施） 綾瀬市教育研究 2015 3 月
- ・幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申） 中央教育審議会 2016 12 月
- ・小学校学習指導要領（平成 29 年告示） 2018 3 月
- ・中学校学習指導要領（平成 29 年告示） 2018 3 月
- ・志水宏吉『成功例・失敗例から見えてきたこと 納得の行くビジョンを示し、教委と現場のベクトルをそろえることが、施策成功の鍵』 「VIEW21」教育委員会版 2016 年度 Vol. 3